

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530761

研究課題名（和文） 問題行動・指導・評価をめぐる歴史・社会学的研究：
子どもへの〈まなざし〉に着目して

研究課題名（英文） Studies in Sociology and History of Education Concerning "Problem Behavior", "Guidance" and "Evaluation" in School : Focusing on the "Regard" to Child

研究代表者 北澤 毅（KITAZAWA TAKESHI）

立教大学・文学部・教授

研究者番号：10224958

研究成果の概要（和文）：教育の場において大人と子どもは非対称的な関係にある。そこには子どもへの〈まなざし〉ともいうべき文化的・社会的規範があり、それは教育事象自体を成り立たせているものである。本共同研究は主に社会構築主義・エスノメソドロジーの方法を駆使し、教育実践現場における相互行為場面から今日流通する教育言説、さらには歴史的資料までも射程にとらえ、「子どもへの〈まなざし〉」に関する総合的研究を行った。

研究成果の概要（英文）：The relationship between adults (teachers) and children (students) in school is not symmetrical. Teachers have power to define what happens there. There are some specific norms named "Regard to child" and these norms constitute educational phenomena. While examining the interaction which took place in classrooms, we studied current discourses on education and historical documents of school from the perspectives of social constructionism and ethnomethodology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：教育社会学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：教育学・社会学・問題行動・教育評価・生徒指導・学校的社会化・身体技法・教育言説

1. 研究開始当初の背景

これまで本研究代表者は「文化」を「行為系列の中に観察可能となる〈規則性〉のことである」ととらえ「感情の社会化」に関する総合的研究を行ってきた（平成16年度～18年

度科学研究費補助金基盤研究（C）：「『感情』の社会化に関する総合的研究：『文化としての涙』の形成過程に着目して」（研究代表者：北澤毅）。ここで想定する「規則」とは、明文化されたもの（法律、校則、競技ルール等）

のみを意味するものではなく、むしろ人々の相互行為過程から観察される行為の形式に埋め込まれたものである。あるいは少年犯罪やいじめなどの教育問題・社会問題の語られ方の中にも制度化された言説の形式が埋め込まれている。このように本共同研究が想定する「規則」とは、人々の行為や語りに根差すものである。

さてこのような「規則」とは、私たちの具体的な日常生活から社会一般のレベルまでに流通する「規範」と密接な関係をもっている。そのなかでも教育という人類にとって根源的な社会的営為は、当該社会の規範と不可分な関係にあるのは言うまでもない。本共同研究はこの規範を「大人」から「子ども」への〈まなざし〉という観点からとらえ直し、教育事象の総合的研究を目指すために立ちあげられた。

私たちが「子ども」に向ける〈まなざし〉は、独特の規則を有した文化的現象として観察可能である。というのも、こうした〈まなざし〉は、デュルケムの言う集合意識に近い普遍化された社会性を有するものと見なせる一方で、同時に日常的場面の教師・生徒の相互作用における「評価」等の営為のなかで立ち現れる特質を有している。もちろんこのような視点に依拠した日常的相互行為に関する研究ではすでに一定の蓄積がなされているものの、本共同研究はそれらの先行研究に手掛かりを求めながら、社会学・歴史社会学の知見を複合的に採用することによって、教育実践のさらなる理解を追求することを目指した。

2. 研究の目的

上述のように、本研究では教育実践における「問題行動」及び「指導」「評価」を、社会的に共有された「子どもへの〈まなざし〉」が具現化されたものとしてとらえている。そしてこの文化的・社会的規範を包括的に定義するのではなく、多様な教育活動場面やテキストデータ等を精密に記述・分析することが本研究の目指すところとなる。本研究代表者及び分担者・連携研究者は教育社会学(北澤、間山)及び歴史社会学(有本)を専門領域としており、「評価」「指導」及び「問題行動」をめぐる教育事象の社会的特質を社会学・歴史学の観点から明らかにすることを目指した。そこで本研究では、

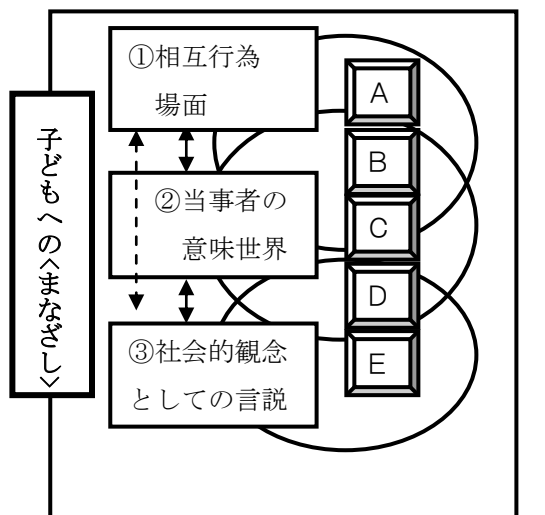
- (1) 「問題行動」「指導」「評価」の分析を通じた逸脱理論の再構築
- (2) 社会的観念としての近-現代教育言説の歴史的分析
- (3) 学校における授業場面の参与観察研究

を行い、現代の教師をはじめとする「大人」たちがどのような制度的・言説状況の下で「評価」「指導」を実践し、その〈まなざし〉が子どものどのような行動を「問題」として構成するのかを明らかにすることを目的とした。というのも、「子ども」の「問題行動」は、それを「問題」として記述する「大人」側の〈まなざし〉と不可分であると本研究ではとらえており、ゆえに「評価」「指導」は「問題行動」と表裏一体の実践としても観察されるものであるからだ。

以上のような方法・着想のもと、教育場면을構成する営為がどのような意味を生成し、その場面に参与する人びとはその〈まなざし〉をどのようにして日常生活世界のなかに組み込んでいくのかを明らかにすることで、現代の教育実践にとっての新たな知見の展開と提言を目指した。

3. 研究の方法

本共同研究は教育活動における「評価」「指導」「問題行動」に着目し、それら営為の有する社会的・文化的特質を総体的に「子どもへの〈まなざし〉」として定義した。それらへの接近方法は具体的な相互行為場面から広く社会に流通する教育言説・歴史資料の分析であることは先述したとおりであるが、具体的な手法は以下のように図示される。



- A : 相互行為分析
- B : 会話分析
- C : インタビュー調査・教育実践者とのディスカッション
- D : 言説分析
- E : 史資料分析

上図を研究の基本軸として、本共同研究は主として社会構築主義・エスノメソドロジの

手法をもとに研究を進めてきた。とりわけそのなかで得られた新たな知見（「4. 研究成果」にて後述）をもとに、上図A・B、Eの調査・分析が重点的に行われた。そしてそこでの児童・教師らの相互行為が有する歴史性に着目するEの分析が推進された。またこれらの研究成果は観察対象である小学校教員たちとのデータ・セッション、年に二回開催される初等教員たちとの研究会において報告され、当事者の視点（C）を取り入れることにより考察に厚みを増すことに成功している。

4. 研究成果

(1)教育実践場面における「まなざし」と「児童の成立」

先述した研究方法A Bの具体的な研究成果の例は下記①②である。ここではその概要と得られた知見を簡単に報告したうえで、本共同研究の総括的な知見を述べていく。

①2008年教育社会学会発表（学会発表4）

①-1. 小学校1年生の算数の授業で児童が計算の「やり方」を説明する場面の相互行為分析を行った。その結果他の児童や教師に計算の「やり方」を説明する実践を通して、児童は説明をする側と聞く側の遂行という学校生活で必要なふるまいを獲得していることを明らかにした。

①-2. 小学校1年生の授業において、開始や場面の切り替えに際して守られるべき「きまり」が教師と児童のあいだで確認されるような場面に着目し、分析を行った。その結果、こうした児童らによる「きまり」の確認の実践は、その場面の参与者たちに自らの「教師」と「児童」の成員性を具体的に確認させると同時に、児童にはその場で児童としての活動が求められていることを具体的に確認させる機能を有することを明らかにした。

②2009年教育社会学会発表（学会発表1）

②-1. 小学校1年生の初期授業場面において教師が「挙手ルール」を提示し、児童がそれに従いながら挙手を実践していく一連の相互行為の分析を行った。分析を通して、「挙手-指名」という行為系列が、小学校1年生という学校的社会化の初期段階にある児童に対して、授業において必要とされる学校特有の行為形式は「しつけていく」と同時に「個人」として場に参与しながら「集団」であることを習得させていく機能を有することを明らかにした。

②-2. 小学校1年生の授業において、教師の質問に対し児童が「答え方」という点では不十分な応答をする場面に着目し、そ

の後に続く教師と児童とのやりとりを分析した。その結果、教師は一連のやりとりのなかで「答え方」において必要な要素を定式化しており、そのような相互行為を通して児童は小学校の授業場面において適切な「答え方」を習得するということが明らかにした。

以上のような教育現場での相互行為場面の観察・分析を行っていくなかで際立ったのは、小学校という空間に流通する独特な規範・規則の存在であった。それは着席や整列、授業内での発言及び挙手の仕方等様々であるが、ここで挙げた学会発表成果①②は、計算の解き方、授業開始・終了の際の決まりごと・授業内での挙手の仕方・算数の解の説明の仕方といった、小学校ないし学校空間特有の規則を児童・教師が協働的に実践している場面を分析したものである。

本共同研究が実施してきた研究会及びデータ・セッションにおける小学校教員の意見でも多くあったように、教師は授業を「授業」らしいものとして成り立たせるための様々な工夫や戦略を駆使し、一方子どもたちは入学すると即座にこれらの「学校的」なふるまいや姿勢を身につけることが要請される。実際本共同研究の観察においても、小学校1年生の1学期では、授業において教科の知識伝達よりもこれら様々な「学校的」規則の習得に時間が割けられていたことが明らかになっている。

これらの知見から明らかとなったことは、子どもたちは学校空間における「まなざし」のもと、自身を「児童」として再構成させることが要請されているということである。すなわち②-1で明らかにしたように、彼ら・彼女らは学校空間における「集団（の一員）-個人」という身体動作の様式・自己概念を相互行為の積み重ねのなかで培っていくのだといえる。そしてこの独特な相互行為の規則・規範は児童らへの「指導」「評価」において際立つものである。いうなれば観念としての「児童」が参照されながら、小さき存在であった子どもたちは学校という独特な空間における行為主体としての「児童」になるべく導かれており、その一方でそこから逸脱する者は「問題をもつ児童」として理解され、それに見合った対応をされることとなるわけである。

以上の知見から本共同研究が導き出したのは、「子どもへのまなざし」のもと、学校空間において小さき存在は「児童」という独特の存在へと変容する過程にあるということである。この過程を本共同研究は「学校的社会化」として定義した。すなわち子どもた

ちは単なる個体として発育・発達するのみではなく、また広く一般的な意味での社会の一成員としての資質を獲得するのでもない。小さき存在である子どもたちは学校という（就学前の彼ら・彼女らにしてみれば）異質な空間へと身を投じ、日々の相互作用を重ねていくなかで「児童」という独特の存在へと社会化されているという仮説である。

このメカニズムの解明は、とりもなおさず私たちが日常的に自明視する「子どもらしさ」や教育観念そのものを具体的かつ実証的に明らかにしていく探究にほかならず、教育事象のさらなる理解と教育研究の発展における重要な意義を見出している。

(2) 「まなざし」と「歴史的な身体としての児童」

①の相互行為分析において本共同研究が得たもうひとつの知見が、学校空間における「まなざし」、さらには身体としての「児童」が有する歴史的な特質である。言うまでもなく、今日我々が自明のものとしている学校文化は、明治期の近代化の過程において成立したものである。同様に我々にとってなじみ深い学校的な所作や姿勢、すなわち「児童」としての身体動作等は、わずか数十年の間に作り上げられたものである。小さき存在であった子どもが「児童」へと変容する過程に着目することの重要性は先述したとおりであるが、現前する彼ら・彼女らの「児童」としての身体は、それ自体が歴史性を有したものであるに違いない。ここで本共同研究がたどり着いた知見は「歴史的な身体としての児童」ともいうべきトピックである。

すなわち相互行為場面における「学校的社会化」の過程を分析する一方で、その背景に横たわる「学校的社会化」の歴史的成立過程に着目することで、本共同研究が目指してきた「児童」およびそれに向けられる「まなざし」の社会的・文化的特質の総体が立ち現れることとなる。こうした見通しの下に、本共同研究において史資料分析を基に行ってきたのは、以下二つのテーマの探求である。

その一つは、卒業式の成立と定着過程の解明である。日本の卒業式は、単に卒業証書を授与するだけではなく、「児童」が習得した「卒業生にふさわしいふるまい」や「成長した姿」を披露する場としても機能している。そのため、卒業式において児童たちは、その身体を以て「学校的社会化の到達点」を示すべく、時間をかけて指導されることになる。こうした学校文化が確立されていく経緯は、「児童」への「まなざし」の変化を直接に反映している。本研究では、明治期の史資料調査を通して学校儀式の成立に関する新たな

史実を明らかにし、卒業式に対する観念の形成についても成果発表を行ってきた。（「5. 主な発表論文等」以降を参照）。

もう一つは、明治期から昭和初期にかけて小学校で実施されていた「個性調査」への着目である。「個性」自体、学校教育同様日本の近代化のなかで輸入された新しい概念であるが、「個性調査」の実践においては、児童らの気質・素行・学力のみならず、身体の生育状況・疾病の有無、家族構成、友人関係、近隣住民の情報等実に多様な項目が設定され、「個性調査簿」に記録されていた。

この「個性調査簿」の項目自体が当時社会の「児童へのまなざし」を具現化したものであることは言うまでもない。だがさらには、その調査実践において、実際に教師は児童らをどのように観察・記述していたのだろうか。この問いは先述した児童への「まなざし」、「身体」の歴史的・文化的特質を明らかにするものであるといえ、本共同研究では東京都内・茨城県内・山形県内において「個性調査簿」を所蔵する複数の小学校を訪問し、データの収集を進めてきた。これを基にさらなるデータ収集とデータベース作成を予定しており、具体的な成果発表は平成 22 年度からの科研費研究に引き継がれる。

以上①②の研究成果及びそこで得られた新たな研究課題は、2010 年度新規採択された科学研究費補助金基盤研究（C）「学校的社会化の現状と歴史に関する研究：＜児童の成立＞の解明に向けて」（研究代表者：北澤毅）に受け継がれ、さらなる発展が目指されている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

1. 北澤毅, 2010 (近刊), 「学校的社会化の研究 方法」『立教大学大学院教育学研究集録』(7).
2. 有本真紀, 2009, 「明治前期・中期における卒業証書授与式の意義—式手順の検討を通して—」『立教大学教育学科研究年報』(52), pp. 5-29.
3. 有本真紀, 2009, 「卒業式の唱歌をたどって」わらべ館 童謡・唱歌研究情報誌『音夢』(3), pp. 2-13.
4. 有本真紀, 2009, 「校門の外をめざした学校唱歌—卒業式による広報戦略—」立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター『大衆文化』(2), pp. 44-58.

5. 有本真紀, 2008, 「卒業式の成立と定着過程—明治期前半の教育雑誌・学校日誌を通して—」『立教大学教育学科研究年報』(51), pp. 5-20.
6. 北澤毅. 2008, 「『いじめ自殺』の構造—テレビドラマ『わたしたちの教科書』の分析を通して」『立教大学教育学科研究年報』(51), pp. 35-51.
7. 北澤毅, 2008, 「『いじめ自殺』物語の解体」『現代思想』(36-4), pp. 200-213.

[学会発表] (計 5 件)

1. 北澤毅・鶴田真紀・山田鋭生, 2009, 「学校的社会化の諸相(2)—〈質問-応答〉と〈挙手-指名〉への着目—」日本教育社会学会第61回大会, 2009年9月13日, 早稲田大学.
2. 有本真紀, 「明治前期・中期における卒業証書授与式の意義」第19回教育目標・評価学会大会, 2008年11月30日, 東京学芸大学.
3. 有本真紀, 「明治前期・中期における卒業式唱歌の定着過程」第39回日本音楽教育学会大会, 2008年11月8日, 国立音楽大学.
4. 北澤毅・越川葉子・高橋靖幸, 「学校的社会化の諸相(1)—教室における知識とふるまいの習得—」日本教育社会学会第60回大会, 2008年9月20日, 上越教育大学.
5. 有本真紀, 「明治期における卒業式手順の定型化—卒業式の類型と意味—」音楽教育史学会第21回大会, 2008年5月17日, 立教大学.

[図書] (計 3 件)

1. 有本真紀, 2009, 「明治中期以前の卒業式次第における唱歌—卒業式に対する観念の成立過程解明へ向けて」, 日本音楽教育学会編『音楽教育学の未来』日本音楽教育学会設立40周年記念論文集, 音楽之友社, pp. 60-69.
2. 門脇厚司・北澤毅(編)/山村賢明(著), 2008, 『社会化の理論・山村賢明教育社会学論集』世織書房, 395.
3. 北澤毅・古賀正義(編), 2008, 『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社, 280.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北澤毅 (KITAZAWA TAKESHI)
立教大学・文学部・教授
研究者番号: 10224958

(2) 研究分担者

有本真紀 (ARIMOTO MAKI)

立教大学・文学部・教授
研究者番号: 10251597

(3) 連携研究者

間山広朗 (MAYAMA HIROO)
神奈川大学・人間科学部・准教授
研究者番号: 50386489